

## 「狐」(D・H・ロレンス)

共に三十歳近い二人の女の暮す農場は、經營が餘り芳しくなかつた。何せ二人共家畜の本性も知らずに飼育してゐたし、趣味や讀書に時間を割く様な暮しぶりでもあつたからだ。一人はバンフォードと云つて、小柄で眼鏡を掛け身體が弱く、薄い弱々しい髪には早くも白髪が目立つてゐた。父親が縁遠さうな娘を心配して、身が立つ様に經營の資金を提供してくれたのだつた。もう一人はマーチと云つて、金は無いが身體は丈夫で、「農場の男手」として野良仕事を引受けてゐたが、顔は男の様ではなく、豊かな黒い髪につぶらな黒い瞳を持ち、何やら「奇矯な、説明しがたい」表情をしてゐた。二人は結局養鶏だけをやる事にしたが、狐が屢々鶏を掠つて行く。銃を持つて見張りに立つが効果は無い。

或日もマーチが見張りに立つてゐると、牡狐オスが現れ、「するどい精悍せいけんな目」でこちらを見詰める。マーチは何故か狐が「自分の心を征服した」と感じる。以來、狐は「心の中にどうしよ

「うもなく住みつ」いて仕舞ふのだが、それから數箇月後の冬の夕べ、二十歳そこそこのヘンリーといふ若い兵士が突如姿を現した。農場の先代の持主の孫で、休暇を貰つて、祖父の死を知らずに訪ねて來たのだ。その顔の「金白色の産毛、きらきら光る、するどい目」を見て、マーチには彼がかの狐としか思へない。若者は農場に暫く滞在するが、バンフォードが彼を弟の様に扱ふ一方、マーチは彼の目の發する「火花」が己れの「魂に食ひ込んで」來て、その聲の「不思議な力」に全身が縛られる様に感じる。若者も彼女の「黒い瞳」に心踊り、ドレスを着た時の別人の様な女の姿に「獵人<sup>れふじん</sup>」としての己が「男」を自覺して、捕獲してやる、と決心して求婚する。マーチは一旦は承諾するが、女二人の絆を斷たれるのを恐れたバンフォードから、己れを安賣りして物笑ひの種になるなと猛烈に反對され、バンフォードの方を愛してゐると自らも考へ、部隊に戻つたヘンリーに婚約解消の手紙を送る。

激怒したヘンリーは邪魔なバンフォードを斥けるべく、自轉車で四時間かけて農場に辿り着く。マーチは男への愛を自覺する。丁度その時女達が大きな枯木を切り倒さうとしてゐたのをヘンリーは手傳ひ、殺意を懷きつつ枯木に斧を振ふ。バンフォードは倒れる枯木の直撃を受け死ぬ。その後、ヘンリーとマーチは結ばれるが、男は女に「本然<sup>ほんぜん</sup>」の女たるべく「沒我」の

愛を要求し、女は「没我の自分になり切れ」ず、葛藤が續いた儘物語は終る。

ヘンリーの激しさに鼻白む讀者もゐるであらう。だが、ロレンスはバンフォードの様に男女の性愛に無感覺で生命力を缺く手合を本氣で憎んだ。「チャタレー夫人の戀人」のメラーズ即ちロレンスは云ふ、「あの連中には死を與へるのが一番思ひやりのある事だ」、「彼らの持つてゐる魂は腐つてゐる」、「僕には彼らを撃ち殺す權利がある」（伊藤整譯）。ロレンスにとつてバンフォードは「チャタレー夫人の戀人」のクリフォードと同様、魂の腐つた生ける屍しかばねでしかなかつた。一方、ヘンリーは男の「本然」の衝動に従ふ存在として描かれてをり、性愛の對象として熱烈に女を求め、女の「没我」の服従にこそ満足を覺える。然るに、マーチは本來性愛に敏感な女なのに男の役割を演ずるといふ、かねてよりの自己分裂を何時迄も脱卻出来ない。さういふ結末は、己が理想の男女關係の困難をロレンスが意識してゐた證左でもあらうが、それはさて置き、ロレンスは男女平等だの生命尊重だのといふ所謂近代的觀念の跋扈はつこする風潮を、眞の生の健全や充實に敵對する虛妄きやまうとして容赦無く彈劾した。所詮「人垢ひとあか」でしかないそれらを奉たてまつる事しか知らぬ當節の大方の日本人との距離は天文學的と云ふしかない。

（蒔澤忠枝譯、「ロレンス」、新潮世界文學）